# 南房総市エコツーリズム資源調査

平成１９年３月

# 南房総市

# 目次

◆はじめに・・・・・・・・・・・・・・・・・・2
◆第１章　南房総市・・・・・・・・・・・・・3
◆第２章　富山地区・・・・・・・・・・・・・３２
◆第３章　富浦地区・・・・・・・・・・・・・６３
◆第４章　三芳地区・・・・・・・・・・・・・８３
◆第５章　和田地区・・・・・・・・・・・・・１２９
◆第６章　丸山地区・・・・・・・・・・・・・１４８
◆第７章　千倉地区・・・・・・・・・・・・・１７７
◆第８章　白浜地区・・・・・・・・・・・・・１９５

◆資料編・・・・・・・・・・・・・・・・・・・２１３

# はじめに

## １．調査目的

地球温暖化や資源の枯渇問題など世界的にも地球環境を消費する時代から地球環境を守り継続する時代となり、自治体をはじめ企業など様々な立場でエコ社会の形成に努め、あらゆる場面で“エコ”という言葉に触れる機会が増えました。身近なところではゴミの分別やリサイクル商品の利用などエコ社会の一員として関わりを持ち生活をしている。

このようなことを背景に、市町村合併により南房総市が誕生し、南房総国定公園有する海域や富山、伊予ヶ岳、御殿山などの山岳などの豊かな自然、源頼朝や里見氏、南総里見八犬伝などの歴史、石堂寺をはじめとする重要文化財やクジラ食文化など地域固有の資源を多く有することになり、さらには館山道の延伸も目前に控え、市民はもとより都市住民においても本市におけるエコツーリズムに対する期待は大きく、具体的な取り組みが求められてる。

本調査は、このエコツーリズムを実践するための具体的な取り組みであるエコツアープログラムの開発、ガイドマップの作成、情報発信、資源保全のルール作りなどの基礎資料となる地域の自然、歴史、文化、産業等の地域資源や利用者のニーズを把握するために行う。

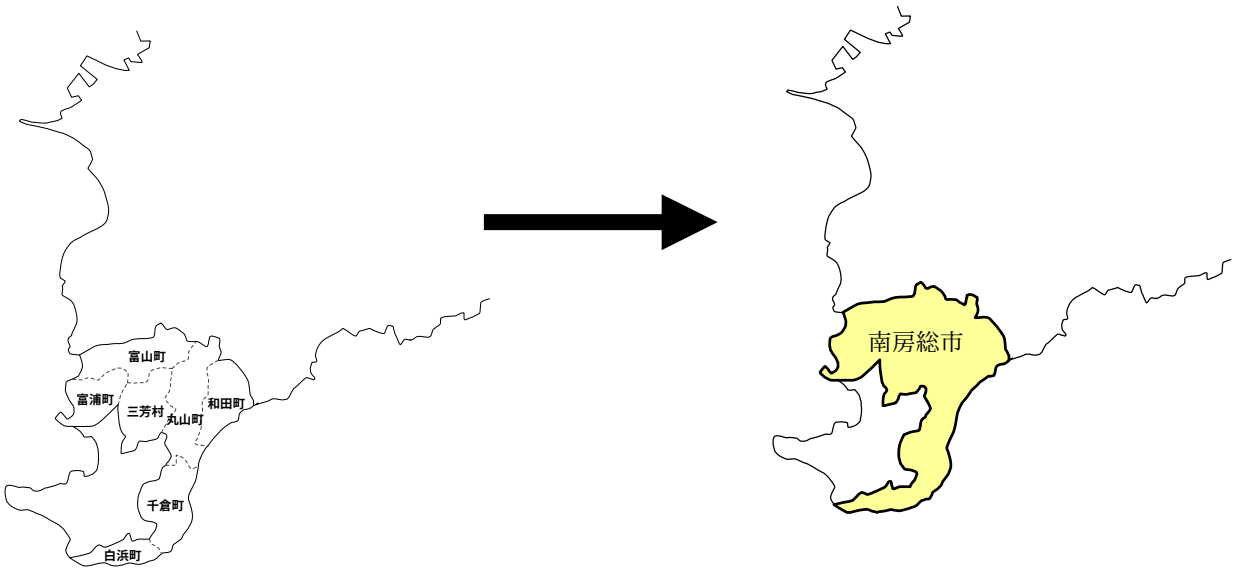
# 第１章　南房総市

## １．　市の沿革

南房総市が位置する安房地域は、718 年に上総国から分かれ明治初期まで安房国と呼ばれ、かつては多数の荘園が存在しており、これらは中世末まで統治者の交代を繰り返してきました。戦国時代に入り 15 世紀中頃に里見氏が安房統一を果たし、戦国末期に館山城を築城して安房国統治の拠点としました。しかし、その後里見氏は、江戸幕府による全国支配体制の確立により、1614 年に改易され、以降この地は旗本領、天領、小大名の領地として分割統治されることとなっている。

近代に入り、明治4年廃藩置県によって本市区域は木更津県の所管となりましたが、明治６年に木更津県が廃止されてからは、千葉県の所轄に属することになりました。明治11年の郡区町編成法施行により郡制を施行し、明治30年には「交通の便が相互にあり、且つ民情風俗に大差ない」という理由から、安房郡、平郡、朝夷郡、長狭郡の四郡を合併して、安房郡が形成された。

そして昭和 30 年前後に安房郡富浦町、富山町、三芳村、白浜町、千倉町、丸山町及び和田町が誕生し、平成 18 年 3 月 20 日、この 7 町村が合併し、新しく南房総市となった。面積は、２３０．２２ｋ㎡に及び，新市としては県内で千葉市に次ぐ４番目の面積となる。



## ２．　位　置

首都東京から１００㎞圏に位置し，時間距離２時間程度，県庁所在地の千葉市までは１時間３０分程度の時間距離にある。

平成９年に開通した東京湾アクアライン，平成１６年に開通した一般国道１２７号富津館山道路に続き，来年度には東関東自動車道館山線が開通する見通しとなっており，東京圏からの時間距離の短縮により、首都圏と経済、文化交流の増大が期待されている。

## ３．　地　勢

本地域は，房総半島の南端に位置し，房総丘陵が広がり、北側には県下最高峰の愛宕山（４０８m）をはじめ，富山（３４９m）等３００m級の山が連なっている。西側には東京湾，東側及び南側には太平洋と３方を海に囲まれ，その海岸線は，南房総国定公園に指定されている。最南端は野島崎である。

## ４．　気　候

房総半島の気候は東南アジアのモンスーン帯に入り、冬は北西の季節風が卓越し、夏は南東の季節風が卓越する。春には天候の定まらない彼岸時化や、春から夏に入る頃に梅雨の現象が見られ、夏から秋にかけては台風の襲来や、秋霖と呼ばれる長雨が続き、秋の空の天候の定まらない時期が過ぎると、秋晴れの天高く馬肥ゆるの好期となる。冬は房州では名物の西の風が卓越する。房総半島の最南端にある館山市、鴨川市を含む南房総地域は、年平均気温１４．５度、年降水量１，７００mmで、冬暖かく夏涼しく、避暑避寒の好適地で、常春の楽土である。また、海の幸、山の幸に恵まれ、わが国の暖地果樹の代表とされる温州ミカンやビワの営利的栽培の北限とされている。

## ５．　南房総の動植物

### １）冬の南房総

新年を迎える南房総の自然は、岩井川、平久里川、丸山川、三原川等の、川面の光具合で、それを知ることができる。河岸は、河川改修で、近代化されたものの、まだ自然の姿を失わないところが多い。河べりのメダケの竹やぶの葉ずれや、竹幹のそよぎにも、冬至を過ぎて、陽ざしが回復してきた息づかいが感じられる。河岸や、土手、山裾の陽だまりには、いち早く、オオイヌノフグリ・タネツケバナ・ツクシ等が可憐な花を咲かせ出す。

フキノトウもその蕾をもたげだしてくる。「七草がゆ」に入れるセリ・ナズナ・ゴギョウ・ハコベラ・ホトケノザ・スズナ・スズシロの七種は、スズナ・スズシロは菜っ葉と大根で、畑のものだが、他の野草は揃えようと思えばすぐに詰める位に伸びてきている。セリは秋にはつる状に枝を伸ばし、その節に出来た新苗が、程よく成長して食べ頃、ナズナは三芳ではペンペングサともいう、ゴギョウは春先黄色い花を咲かせるハハコグサのことである。ハコベラはハコベのことで小さい白い花を咲かせる。ホトケノザは陽春に小さい菊花状の花を開くコオニタビラコのことで最近少なくなってきている。近頃は冬でも花の咲くセイヨウタンポポが蔓延してきている。カントウタンポポは年１回春先に花が咲くのに対し、これは通年開花して、しかも自花受粉で結実するので、その繁殖力は自然体系を崩してきている。

タネツケバナ

カントウタンポポ

冬の遅い南房総は、落葉木の紅葉が正月を過ぎてもまだ残っていることがあるが、それでも木の実が目立ってくる。マユミ、ガマズミ、マサキ、モチ、クロガネモチ、ヒサカキ、アオキ、マンリョウ、ヤブコウジ、ヤツデ、ネズミモチ等、次から次へと小鳥類のかっこうの餌になる。ツバキの花もぽつりぽつりと開いたのは花びらごと鳥の餌になる。ご馳走になるのはヒヨドリ、ムクドリ、オナガ、カケス類が多い。ツバキといえば、日本産の樹木中で数少ない鳥媒花でもっぱらメジロがこれに当たっている。節分のとき門口にさすヒイラギも数は少ないが自然生のものがある。

節分の過ぎた後は立春である。寒気はいよいよつのるが、自然界は着々と春へその歩みを深めてゆく。狩猟期間中は姿を消していた野鳥たちが姿を見せ始めるのもこの頃からだ。ヤマドリ、キジ等である。その他哺乳類ではノウサギ、リス、タヌキ等の他に最近はイノシシが増え被害が増加している。

マユミ

ガマズミ

マンリョウ

ヤブコウジ

アオキ

ヒサカキ

ヤツデ

2）春近づく南房総

人家の庭にその良い香りを流すジンチョウゲに道行く人が気づく頃、山中でもジンチョウゲ科、オニシバリの淡黄色の目立たない花が開いている。この植物の樹皮が丈夫なのでその名がついたが、一名ナツボウズと呼び、夏は葉が落ちてその裸の小木に紅熟した楕円形の有毒な実をつけて、ちょっと意外な気がする。川べり等に多いハンノキは、いち早く房状の雄花を開いて、多量の花粉を大気中に送り出しはじめる。キブシもこの頃淡黄色の房状の花を下げて咲く。キブシはその実を五倍子（ごばいし；フシ）の代用として黒色の染料として利用するのだが、かって、その木部の髄をぬき出して、子供の遊びによく使われた。クロモジもその品のある細かい花をつけ、ワラビ・ゼンマイ等のシダ類も芽をもたげ出す。いち早く花を飾るものに、ヒガンマムシグサがある。陽当たりの良い山裾あたりでは黄色い花を群がり咲かせる。キジムシロ・タチツボスミレ・ニオイタチツボスミレ・タンポポ・スズメノヤリ等々。また陽かげの所にはムラサキケマン、林道沿いの平坦地ではイタドリが太くたくましい若芽をのばすし、ギシギシ・スイバも負けじと芽をだしてくるが、最近は帰化植物のエゾノギシギシやアレチギシギシが多くなっている。マメ科のヤハズエンドウ・スズメノエンドウ・カスマグサが土手や道端にはびこる。水辺の草類も活動を開始する。ケキツネノボタン・タガラシ等が黄色い花をつける。タネツケバナは小さな白い花を一面にちりばめる。あぜ道や土手にはツクシが伸びきってツバナ(チガヤ)がほうけ、山中ではシュンランがひそやかな花をつける。ヤマルリソウやヤマネコノメソウも一斉に咲きだす。

オニシバリ

キブシ

クロモジ

ヒガンマムシグサ

キジムシロ

ニオイタチツボスミレ

タチツボスミレ

ムラサキケマン

イタドリ

エゾノギシギシ

アレチギシギシ

タネツケバナ

ヤマルリソウ

ヤマネコノメソウ

木本類も春を飾りだす。まず早春の山中を飾るものにモミジイチゴの花がある。葉がモミジに似ているので、その名がついたがキイチゴともいう。割合大ぶりの白花は眼によくつく。花後大きな実を、黄色にし、さげて熟するからキイチゴという説もある。ヤマブキもこの頃から開き出す。ウメ・モモ・サクラと順次その美花を飾るが、ウメ・モモは中国から移入した栽培植物で、日本の野生植物ではない。サクラのうちでいち早く花の咲くのはマメザクラである。このサクラは富士山周辺に多いのでフジザクラの別名もある。房総半島にも植生地域があり、富津市・鋸南町に多く、南房総地区に迄植生分布が及んでいる。日本人はサクラに寄せる心があつい。これは古代に稲作の豊凶をその花の如何によって、あらかじめ祝う風習があったからであり、それが現在まで花見という年中行事の中に生き残っているのである。それ等のサクラは今多く見られるソメイヨシノではない。ソメイヨシノは江戸時代、江戸染井の植木職が、伊豆半島で自然交配の新種を発見、持ち帰りひろめたもので、恐らくエドヒガンとオオシマザクラの間にでき上がった品種であろうと推定されている。南房総地域にもともと自生していたのはオオシマザクラ・ヤマザクラ・マメザクラであろうとされている。それ等の花が緑の中に一株二株と咲いている姿はひときわ美しい。南房総はスギの成育の良好な場所であるのでいたる所にある。スギは用材としても用途が広く、特に直で割り易い性質を利用して、用具の乏しかった太古から盛んに伐採されつづけたというから、大昔は自然の植生分布として、適地である本地区に相当繁茂していたのではないかと推定される。南房総のスギは秋田杉のようなウラスギでなく太平洋岸型の吉野スギタイプのオモテスギという種類である。南房総地域には、神社境内などに相当の巨木が残されている。増間の日枝神社の夫婦杉をはじめとし、境内には相当数の巨木があり樹齢数百年と思われる。スギは二・三月頃、多量の花粉を空中に放出する。春先に多い杉花粉症の原因となっていて有名である。スギは日本列島特産の植物であるので、この花粉症もそうであるが、同じ花粉症でも帰化植物によるものもある。五月頃多いカモガヤ花粉症、十月頃多いブタクサ花粉症など知られている。

ブタクサ

スギの花粉が放出される頃になると、動物たちの動きも少しずつ活発になってくる。今まで地中深くもぐっていたミミズ等が地表近くを這い回るようになると、モグラの活動も盛んになり、新しくもたげた黒い土が数多く見られるようになる。ヒキガエルは一番早く繁殖活動に入る種類である。早春、遅咲きのブンゴウメの花が咲く頃、集団となって池や溝に集まってくる。そして産卵を終えてまた短い冬眠に入る。トカゲ・ヘビなどは、暖かい日に限って少し動き回るが、本格的な活動はもっと先である。昆虫たちも数少ないが少しずつ活動している。サクラが終わるとサトザクラ(ヤエザクラ)の期を迎える。

3）春から夏へと

春たけなわになると、ヤマツツジ・フジ・ガマズミ・カマツカ・アケビ・ミツバアケビ等野山を飾る。ヤマツツジは紅色の濃いものが多い。しかし、山の手入れをしなくなって、久しく常緑広葉樹の下になり枯死するものもあり絶対数も減ってきた。フジは反対にはびこってきている。平地や山裾にはイタドリが太くてたくましい芽を伸ばし、ギシギシ(トティッコ)・スイバ等がジャバ更紗模様の花穂を咲かせてくる。

オオバコも花穂を伸ばしてくる。アヤメ科の植物もこの頃花咲くものが多い。先ず林下でシャガが開く。この頃になると、緑をわたる風のさわやかさを感ずる。黄色い花の咲くキショウブは外来の栽培種だが逸出して、局部的に野生状態になる。同じく逸出したものでニワゼキショウがある。ヒメヒオウギズイセンも同様である。

ヤマツツジ

ガマズミ

カマツカ

アケビ

シャガ　　オオバコ

三芳や富山はミカンの里である。花の咲く頃は　ヒメヒオウギズイセン

甘い香りが漂う。同じ科のサンショウの仲間も時を同じくして開花する。サンショウ・イヌザンショウ・カラスザンショウ・コクサギ等である。キリの花が開き、ミズキの白花がこぼれ、アブラギリ(ロッケノキ)も割合に大きい白花を飾る。常緑広葉樹の美しい新緑が美しく出揃い、古葉をおとしはじめる。スダジイ・マテバシイ(トウジ)など新枝に開花するが、ドングリの熟するのは、年を越して翌年の秋になる二年子であることを知らない人が案外多い。その他クリ・コナラ・アカガシ・ウラジロガシ・カシ・クヌギ等も相前後して開花する。クスノキ科の植物も同じである。クス・ヤブニッケイ(ショウダマ)・タブノキ(オウキ)・シロダモ・ニッケイ等がある。ニレ科の植物は本地方でも生育がよい。ケヤキ・エノキ・ムクノキ等はよく繁茂している。センダンも品のよい花を咲かせる。センダンは生育が早く、樹形が横広がりになるので緑陰樹として良い樹である。アカメガシワ・ハゼノキ・ヌルデ等もあまり目立たない花を咲かせる。蔓性のものも美しい花を咲かせるものがある。スイカズラ・テイカカズラ・ノイバラ・テリハノイバラ等たくさんある。

コクサギ

アブラギリ

スダジイ

マテバシイ

ウラジロガシ

タブノキ

シロダモ

ムクノキ

ハゼノキ

ヌルデ

スイカズラ

テイカカズラ

テリハノイバラの咲く頃は、ヘビ・カエル類の活躍時である。南房総地域に多く見られる両生類は、ヒキガエル・アカガエル・ニホンアマガエル・シュレーゲルアマガエル・カジカガエル・ウシガエル等であるが農薬使用による虫類の減少と、産卵適地の消滅、オタマジクシ時代の被薬等でひどく減ってきている。カエル類を常食とするヘビの仲間も、一頃より数が少なくなっている。棲息するものは、アオダイショウ(オオヘビ)・ヤマカガシ(ヤマカカア)・ヒバカリ(ヤズミ)・ジムグリ(ジモグリ)・シマヘビ・マムシ・トカゲ・カナヘビ等である。

南房総地域は竹の里でもある。わが国に薩摩を通して、中国から入ってきてからわずか二百三十年ばかりで、その食品価値と有用性から全国に普及した。モウソウチクのりっぱな竹林がこの南房総にはいたるところにある。地質気候が合っているのか、その食味の早だし竹の子で有名でよく新聞紙上にも紹介される。モウソウチク以外の竹も、質が良く春から夏にかけて、竹の子の発生のシーズンである。マダケ(カラタケ)・メダケ(シノベ)・ホテイチク・ハチク・ヤダケ・アズマネザサ等がいたるところに見られる。ヤダケは古城跡(滝田城跡など)附近に人為的に植え込まれたものが残存しているのを良く見かける。この竹の子の頃、竹林床によくある小型の植物が開花する。一の谷の合戦の時、敦盛を討った勇将熊谷の名をつけたクマガイソウが綺麗な大形の花をつけるが今は乱獲のため栽培品しかお眼にかかれなくなってしまった。コクラン・サイハイラン・キンラン・シラン等は少ないが生育している。ホタルが姿を見せだす頃、ホタルブクロ・ネジバナ・ヒルガオ・コヒルガオ・ウツボグサ・タケニグサ・アマドコロ・ホウチャクソウ・オカトラノオ・ヤマユリ・ウツギ・ヒメウツギ・ウラシマソウ等夏を色どる花が次から次へと開く。

サイハイラン

クマガイソウ

コクラン

ウツボグサ

タケニグサ

ヤマユリ

ウツギ

ヒメウツギ

←ウラシマソウ↑

（びわの記述）

昆虫類も数多く姿を見せるのは夏である。まずセミの仲間であるニーニーゼミからはじまって、アブラゼミ(オオゼミ)・ヒグラシ(カナカナ)・ツクツクホウシ(ホオシンチョコ)と秋までつづく。

４）秋収穫の頃

夏が終わりに近づくと、稲刈りが始まり、またたく間に広い空地ができ上がる。すると今まで気づかなかった水田の雑草に気づく。稲のあるうちは、除草剤でおさえられたり、光線をさえぎられたりして充分活動ができなかった雑草類が伸びだす。イヌビエ・コナギ・オモダカ・センダングサ・クサネム・タカサブロウ等が目につく。この頃になるとツバメとカモ類との交代が見られる。ツバメは昔は農村の番人であり、数も今より多くたいていの家に巣を営んでいたものだ。最近はほんとに稀にしか営巣を見ない。カモ類は河川・せき・ダム等に居つき春先まで生活する。畑地の雑草も時代により消長があり、姿を消したり、少なくなってきたものに、ハハコグサ・チチコグサ・ノボロギク・スベリヒユ・カラスビシャク・カヤツリグサ等がある。また新しく増えてきたものにハルジオン・ヘラオオバコ・ダンドボロギク・ヒメコバンソウ・シナダレスズメガヤ・ハキダメギク等があり、放置された土地にはセイタカアワダチソウ・イヌムギ・セイバンモロコシ等がある。牧草栽培やハウス栽培に伴い今後も新しく入ってくる可能性がある。

チチコグサ

ハルジオン

ハキダメギク

秋には多くの草木が実を結ぶ時を迎える。また秋になってから花が開いて結実するものもある。秋の彼岸前後は日照・気温・湿度と春の花咲く時期によく似た条件が揃うので、日照時間の短縮に伴って花の出来る短日性植物の天下である。秋の花はヒガンバナからはじまるといってもよい。初秋の花にカワラナデシコ・ミソハギがある。秋の七草の季節である。フジバカマは南房総には見当たらないが、ごく近縁のヒヨドリバナがある。アサガオは今のアサガオでなく、キキョウまたはムクゲを指すというから一応南房総の中で取り揃えられる。また秋はキクの季節である。南房総の野山に野生するキク科のもののうち、野菊と呼ばれているものにノコンギク・シロヨメナ(ヤマシロギク)・アキバギク(キヨスミギク)・シラヤマギク・ユウガギク・カントウヨメナ・リュウノウギク等がある。その他タムラソウ・アキノキリンソウ・ヤクシソウ・ツワブキ・オケラ・コウゾリナ・アキノノゲシ・ホソバアキノノゲシ・メナモミ・オナモミ等キク科のものが多い。その他のものにワレモコウ・オトコエシ・アカネ・リンドウ・ホトトギス・ツルボ・ヤマラッキョウ・ツクバトリカブト・ミズヒキ・ミゾソバ・イヌタデ・オオイヌタデ・ツユクサ・アキノギンリョウソウ・アキカラマツ等数々の花が開く。

ヒヨドリバナ

シロヨメナ

ノコンギク

アキバギク

シラヤマギク

リュウノウギク

タムラソウ

カントウヨメナ

アキノキリンソウ

ヤクシソウ

ツワブキ

メナモミ

アキノノゲシ

ワレモコウ

コウゾリナ

オトコエシ

リンドウ

ホトトギス

ツルボ

ヤマラッキョウ

ツクバトリカブト

ミズヒキ

ミゾソバ

イヌタデ

オオイヌタデ

ツユクサ

アキカラマツ　　クサギ

タラノキ

また木の仲間もクサギ・タラノキ・キヅタ・ヤツデ・バクチノキ等の花はこの時期である。木の葉が色づき、木の実が熟してきて、ヤマイモが掘られる時になる。南房総のヤマイモは味が良いのと、粘りの強い色白の良品であることは定評がある。また、南房総地域は、シダ類の豊富な所である。亜熱帯のものと、温帯系のものと入り混じってにぎやかである。その他特殊なものとしてビャクシン・ホルトノキ・サンゴジュ・マルバチシャノキ等がある。

ヤツデ

5）冬が近づく

年の暮れが近づくと、コウヤボウキの花がほうけ、赤い実のマンリョウ・カラタチバナ・ヤブコウジ・キチジョウソウ・オモト・ナンテン等が、新年にふさわしく色つやを増して来る。ジャノヒゲ(リュウノヒゲ)が青紫の実を色づかせヤブラン・ヒオウギの黒い実がつやを出してくる。樹下ではカンアオイの花が地面にひっついたように花を開く。ヒイラギが白い花をそっと開く。鳥たちの声がひびき立って林中はにぎやかである。当地域にあるカンアオイは、三浦半島にもあるカントウカンアオイという種である。カンアオイは増殖のしかたの遅い有名な植物であり、一年に一センチ程しかその場所をひろげてゆかない。三浦から房州まで太古陸続きであった時代、その植生をひろげてきたのであろうが、両地の間を二百万年以上かかって、ひろがってきた勘定になる。野山にさりげなく生きている植物のいのちも、大変な時間の集積の結果そこに存在しているのである。

コウヤボウキ

カラタチバナ

ナンテン

ヤブコウジ

キチジョウソウ

オモト

マンリョウ

ヤブラン